海蝶ノート 22

吉川英梨

「船内の備品でゾンビに有効な武器は」と特警隊に聞くと‥‥

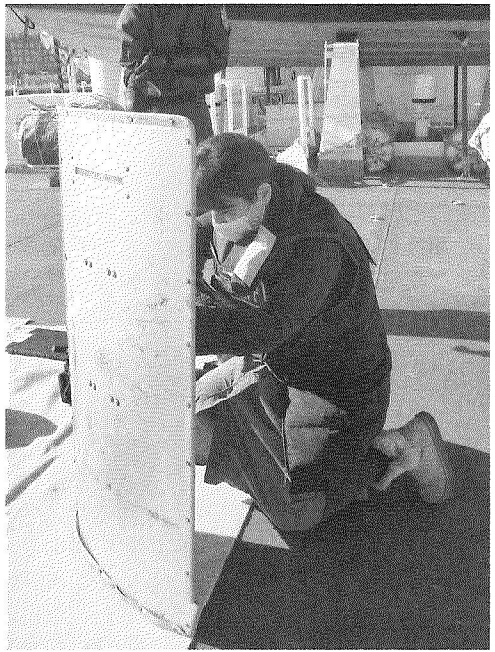
今回もこのスペースを使って５月末に発売された『感染捜査』のお話をさせてください。

私はいつも小説を作り上げるとき、構成表→プロット→第１稿→改稿→ゲラ、と進めていきます。だいたい取材は２回。構成表前の「ネタ探し」としてやるものと、第１稿後の「ディテール磨き」のために行うものです。

今年の１月某日、第三管区海上保安本部で展示訓練があるということ聞き、改めて「ディテール磨き」のため取材に行きました。対応していただいたのは巡視船ぶこうの特別警備隊。あらかじめ質問事項を送っており、装備、人数、女性はいるかなどの基本的な質問から『ゾンビとどういうフォーメーションで戦うか』というばかばかしいトンデモ質問まで、みなさんどこか面白ながらも真剣に答えてくださいました。

それにしてもヘリ甲板の上に並べられた基本装備を、説明をまじえて淡々と着用していく特別警備隊員の姿、恰好いいですね。どの順番でどうつける、これがあるからそっちはここにある、という効率性と体系的なものがひとりの人間の体にぴっちりとはまっていく過程に、ある種の様式美を感じ、ほれぼれいたしました。実際に出動するとき現場の海上保安官はそれどころではないとは思いますが‥‥‥。

さて、物語の終盤、ゾンビ船と化した船内で生き残った海上保安官と警察官が死闘を繰り広げていく中で、『銃器が使えない状態でゾンビを倒していかなくてはならない』状況に陥ります。この時、船内にある備品でゾンビに有効な武器はないのかと私は豪華客船のパンフレットを見たり船の法定備品を調べたり、子供向けの『分解する図鑑』まで購入して調べたのですが、よいアイデアが見つからず‥‥‥。



ぶこう甲板で特警隊の装備を取材する筆者

ちらりと特警隊の方に相談してみると「警杖（けいじょう）をグラインダーで尖らせればいいんですよ」とあっさり５秒で解決。樫（かし）の木でできた警杖で、ゾンビの眼球をついて脳を破壊するために尖らせるのですが、グラインダーを使うというところがまさに海上保安官ならでは。たいていの船の機関室にグラインダーがあるということはやっぱり一般人は思いもよらないので、常日頃から巡視船艇に乗っている海上保安官らしい知恵だなと思います。このあたりのディテールを強化できたことで、『感染捜査』の主人公・来栖光の魅力が倍増したと思います。

私の作品に登場する男性キャラの中で最も人気なのが、『十三階シリーズ』に出てくる男性スパイで、「不死身か」とたびたび突っ込まれるほど逞（たくま）しく、また機知に富むキャラなのですが、『感染捜査』の来栖光はこれを超えて最強になったなと思いました（笑）。

この来栖光を産み出せたのも、『海蝶』執筆から含め、本当にたくさんの海上保安官のみなさんが、その哲学だったり生き様だったり思いだったりを、腹を割って話してくださったからだと思います。本当に感謝です。

次回より再び『海蝶』の話に戻ります。

（つづく）

海上保安官らしい実戦の知恵で５秒で解決